



4

未完成とのことだったのですが、もう…あまりにも変なポーズなので気に入ってしまいました。  
なにか叫んでますか？大橋さん曰く、「これは取えてあり得ない格好に…座らせようかと思ったんだけど。」

# 1

## 木彫工房「悦鹿」 大橋望彦さん

ムクムクとしたこれ、鹿なんです。しかも…ちゃんと骨格を考えて彫られているんです。このチャーミングな木彫を制作なさっている、大橋望彦さんにお会いしました。定年後知り合った先輩の画家から見せてもらったルーブタイ。木彫の鹿があしらわれていました。思ったのは「これ、自分にも彫れそう」。それから彫ってみたのがきっかけ。もとは生化学の医学博士。教育大学理学部に進み、試験管を洗うところから入ったそう。癌研究の日本での草分けで、ずっと第一線で走り続けてきました。「大病もしたけれど、生き永らえた。大動脈瘤になった時はクスリで血圧をぎりぎりに下げて、あとは自然治癒力に任せた。6ヶ月ほどで治って職場に顔を出したら、びっくりされたよ。癌は専門分野だったから、大腸癌になった時は思いきり切り開いてと、自分が一番信頼してた外科の医者に頼んで治してもらったの。また生き返ってすみません(笑)。」

無事に定年退職をし、女子大での教職も勤め上げ、その頃から奥多摩へ移り住みます。「鹿なんかよく見たことがなかったからね、最初のうちは井の頭公園の自然文化園とかへ



工房の大橋さん。使いやすいよう、道具の配置にもひと工夫が凝らされています。

行って1日中眺めたり、ビデオや写真とつったよね。座ってるのとか、もういろんな格好してるのを。」夢中になると研究熱心です。悦鹿さんのつくる動物はだから生き生きとしているんですね。

「ヒノキの節なら真っ赤な硬い素材で艶が良いし、桑の木なら、中心部分が焦げ茶色してるから、その部分が鹿の顔の部分にちょうど良い。ほら。」と可愛らしい鹿の顔を指差して教えてくださいました。

なるほど、ちょうど鼻の部分を筆でひと刷毛したようになっています。

なにもかも自己流で、「木材に鉛筆で簡単に下書きをしたら、電動彫刻刀で荒く削りだす。彫刻刀でやるより速いの。」角のような細かい部分はルーターに持ち替えたりと、道具を使いこなします。

「飛騨高山で展示会をやっていたら、その一刀彫の人に『これはあんたにしかできない技だね。』って言われたよ。」

鹿たちの戯れるシーンや天を仰ぐ姿など、情景にぴったりのタイトルのついた作品は見る人にすぐに納得されます。それで今日もまた制作に大忙しです。

5

左/ファーを首に巻きつけた鹿。可憐です。中/「最近はおふくろうも作ってるんだよ。」これはピンブローチ。右/帽子につけて。

